

## 「立ち上がる農山漁村」選定事例概要

取 組 分 野：【交流】

- 1 . 都道府県、市町村 長野県飯山市<sup>いいやまし</sup>
- 2 . 事 業 者 名 (財)飯山市振興公社 なべくら高原・森の家
- 3 . 取 組 みの 名 称 グリーン・ツーリズムに端を発した地域資源活用の取組
- 4 . 取 組 概 要 等

### 概 要

「なべくら高原・森の家」は飯山市のグリーン・ツーリズムを柱とした交流事業として、都市住民・地域住民・県内外の児童・生徒の体験学習・地元宿泊業者などを対象に、四季を通じて自然体験プログラムの提供を行ってきた。それらのプログラムは企画運営する常駐スタッフの他に、地域の人材活用という視点から「市民インストラクター」制度を導入。約240名の登録者により実施されている。

また常駐スタッフは半数以上が県外出身者であり、“外者”の視点から地域で埋もれかねない歴史・文化・風習や自然景観等を発掘し、都会へ情報発信する役割を担っており、特記すべき事項であるといえる。

平成13年3月に地域資源たるブナの森の保全・再生活動を行う「いいやまブナの森倶楽部」を立ち上げ、施設内に事務局をおいた。地元住民・有職者・市・県・国等の行政機関や観光関係者、そして都市住民が協働し、地域の宝の里山をどのように活用すべきかを協議し、森林内での保全活動や巨木の保護活動を行ってきた。その活動はブナの森にとどまらず山里の景観維持活動に広がり、平成14年から里山再生活動、平成18年より空き寺再生プロジェクトへと発展、空洞化しがちな農村に再度目を向ける取組に至っている。

平成15年に長野・新潟両県境に約80kmのロングトレイルを設置し、管理運営を行うNPO法人「信越トレイルクラブ」を設立(NPO法人認定は平成16年2月)し、施設内に事務局をおいた。当トレイルは9市町村が接することから、施設周辺の農村内における活動にとどまらず、林業分野とのつながりも強化し、自治体の枠を越えた地域活性化を図るきっかけを生み出した。また信越トレイルクラブの活動は、各地に存在するボランティア団体との連携や交流を生み出した。

260haに及ぶ国営農地、市を縦断する国内最長の千曲川、春遅くまである残雪などの地域資源を活用する企画であり、市だけでなく県や国の機関と横断的な連携を構築し、多岐にわたる活動を推進することで地域活性化の創出を実現している。

### 活動の規模

項目	H13	H14	H15	H16	H17
来客数	24,130	25,290	30,180	20,690	21,350
解説	単位：人 体験参加者・視察・団体利用の人数				
雇用者数	8	8	9	8	8
解説	単位：人 常駐スタッフ数				
イベント回数	740	780	810	680	920
解説	単位：回 体験各種企画数				
イベント参加者	11,540	10,960	12,400	8,780	9,730
解説	単位：人 宿泊、体験、食堂等利用者数				

## 活用している地域資源

飯山市 柄山・土倉集落内:田・畑・古民家、温井集落内の空き寺「大応寺」、飯山市無形民俗文化財「桑名川神社祭礼」

飯山国営農地：そばのオーナー制度・野菜の宅配便

鍋倉山一帯ブナの天然林(国有林・民有林)、千曲川の川下り

紫米・スノーキャロット・炭俵等特産物販売

いいやま湯滝温泉・戸狩温泉などの温泉施設

関田山脈 長野・新潟県境

人的資源:240名の市民インストラクター等

## 地域活性化のポイント

スキー産業の低迷と豪雪地故の生活難や雇用機会の減少、過疎高齢化が進む飯山市において、四季を通じた誘客の強化、豪雪や山林等の地域資源を再認識できる施設および人材が求められていた。スタッフの移住や都市部から複数の定住者(体験メニュー参加がきっかけで移住してきた人等)もあり、農村部の疲弊していた空気を刷新し可能性を広げた役割は非常に大きい。特にスキー産業に支えられた宿泊業は、生き残りをかけてグリーンシーズンの誘客を模索したが、当施設の活動が体験プログラムの展開や地域資源へ目を向ける原動力となった。スキー場単位で観光協会がある飯山市において、地区を越えて全市的な取り組みとしてロングトレイルや森林セラピー事業にも着手した。

今後の観光業は1ヶ所・1点でなく、面としての取組が必要なことから、市内全域にちりばめられた点をつなぐ役割を果たすことが活性化のポイントと考え、実践が始まっている。

## 事業の今後の展開方向

開業当初は宿泊業者対象に体験ノウハウを伝える講座を設けて市のグリーン・ツーリズム事業のボトムアップを計り、また四季を通じて地域資源を活用し開発した体験プログラムは数えきれない。集大成として平成17年に書籍「365日信州の遊び宣言」を出版するに至ったが、今後は体験プログラムにとどまらず、多岐にわたる10年間の活動を礎に、行政と民間の協働をとりつつ一層の地域資源活用化システム構築につとめる。平成16年には中部森林管理局と共著による環境教育の絵本「なべくら山の森太郎」も出版した。

現在飯山市は、平成18年4月に森林セラピー基地に認定されたことから、森と健康をキーワードとした新しい旅産業を生み出そうとしており、当施設がセラピー基地メインセンターとして既存の機関・施設・システムをいかにつなげていくかがポイントであると考えている。

日本の農山漁村を守るためには、そこで人々が暮らさなければならない。開業以来存在する1ターン就職者の実績をもとに、新たな移住者を受け入れ、過疎高齢化をくい止め、活力ある人材の受け皿づくりも必須である。

農山漁村に人が暮らすには「誇り」がキーワードである。誇りを持ってそこで暮らし、「手つかずの自然」ではない、日本の農村景観ならではの「人々が手をかけた自然」を育み日本文化の継承へと展開していくこととしている。

